様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３４８３

研究課題名（和文）発達障害院生の主体性は発達するか：主体性発現・発達プロセスの支援モデル構築

研究課題名（英文）Can developmentally disabled students develop their agency? Building a support model for the process of manifesting and developing agency.

研究代表者
鈴木　健一（Suzuki, Kenichi）

名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授

研究者番号：１０２８４１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、発達障害傾向が疑われる大学院生に対して，個別心理面接支援，グループ居場所支援をそれぞれ縦断的に行い，発達障害者の主体性が発現し，発達するプロセスを明らかにするとともに、発達障害院生への支援モデルを提示することを目的とした。
　研究の結果、発達障害院生の多くに主体性の萌芽となる児童期の「遊び」体験が乏しいことが分かった。また、カウンセラーと同年齢集団による居場所支援を通して「チャム体験」が生じ、その体験過程において、彼らの主体性が発現することが示唆された。これらのことから、発達障害院生に対し、主体性の発現・発達を促すような関係性原理に基づく支援モデルが有効であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，主体性なき主体といわれる発達障害者の主体性が発現し，発達するプロセスを明らかにした点で大きな学術的・社会的意義が認められる。わが国の発達障害学生支援の多くは、社会的スキル獲得を主眼としているが、本研究では、それとは異なるパラダイムである、根本的生きやすさの獲得を目指した「関係性の原理」に基づく支援の有効性を示すことができた。これにより、わが国の発達障害学生への支援モデルの幅が広がり、個々の学生に適した関わりに関する研究が活性化すると思われる。また、本研究の知見は、他大学にも応用可能で汎用性が高いことから、今後、わが国の学生支援モデル全体を精査していく上で大いに役立つと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research was aimed to investigate the process of manifestation and development of developmentally disabled students through individual counseling and a group therapy, as well as to build a support model for such students. As a result, we found that most of developmentally disabled students who participated in our study have had little experience of playing with their peers during childhood, which would be germane to developing one’s agency. Through individual counseling as well as group therapy with their peers, undergoing a "chum" experience, and a sense of their agency was expressed during this process of chumship. From the above, it is suggested that a relational model would be effective for nurturing the sense of agency of developmentally disabled students.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学生相談　発達障害　関係性　居場所支援　大学院生

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国の学生相談において、発達障害傾向のある学生の支援のあり方を検討することは喫緊の課題である。従来の発達障害学生支援を概観すると，修学支援，生活面のガイダンス，心理的支援に大別され、それらの多くは、SST や指導・訓練といったスキル獲得を主眼としているのが特徴であった。発達障害者は内的には発達しないため、苦手な部分をスキル訓練で補おうとする、いわゆる行動論に基づいた支援論と言える。一方、このような支援論に対し、神田橋（2010）は，発達障害者は「『関係性』をつかむことができ」，それによって「SST で膨大なパターン暗記をするよりも，根本的な生きやすさを獲得できるようになる」と述べている。また，鈴木（2014）も長期間の支援を必要とするものの，発達障害学生の主体性が発達した事例を紹介している。つまり、彼らは他者との対人的経験に基づいて内的に発達し、主体性を育んでいくことができることが示唆されている。この点からみれば、発達障害学生の支援には、従来の SST や指導・訓練のみならず，根本的生きやすさの獲得を目指した「関係性の原理」に基づいた支援が求められる。例えば、大学内における個人心理面接支援やグループ居場所支援といった，安全感のある支援枠組みを提供することで、彼らの主体性は発現・発達することが予想される。しかし、現状では、学生相談における実践を通して、その詳細やプロセスを明らかにした研究は見当たらない。

また、発達障害の大学生に対する学内での支援が初めて報告されてから約 20 年になるが（福田，1996）、大学院生を対象とした調査は数少ない。大学院へと進学する高学歴の「発達障害とその傾向をもつ大学院生」（以下,「発達障害院生」と記す）の適応課題は山積しており，どのような支援を，どのように実施するのかの解明も欠かせない。

２．研究の目的

以上を踏まえて、本研究は，大学院生の発達障害傾向，適応感及び学生相談への援助志向性の実態を把握し，発達障害が疑われる要支援群に対して，個別心理面接支援，グループ居場所支援をそれぞれ縦断的に行い，主体性なき主体といわれる発達障害者の主体性が発現し，発達するプロセスを明らかにするとともに、発達障害院生への支援モデルを提示することを目的とする。

３．研究の方法

（１）縦断調査：発達障害の実態，適応感，困り感の全体傾向を明らかにするため、大学院生を対象とした質問紙調査、及び、学生相談事例の分析を行った。

（２）実践研究（居場所支援）：発達障害院生における主体性の発現・発達のあり方， 並びに、支援者の応答技術を検討するため、発達障害院生を対象としたグループ居場所支援（週１回、年間約 50 回）を実施し、事例分析を行った。

（３）実践研究（研究室カウンセラー派遣）：発達障害院生における主体性の発現・発達のあり方， 並びに、相談技術の拡大適応の可能性を検討するため、研究室カウンセラーを派遣し、その役割と機能を質的に分析した。

４．研究成果

（１）大学院生の発達障害傾向と困り感

発達障害院生の実態，適応感，困り感を明らかにするため、質問調査を実施した。調査は、2016 年 4 月に大学院修士１年 256 名を対象に行われた。質問内容は、AQ（The Autism-Spectrum Quotient：自閉症スペクトラム指数）、ASD・AD/HD 統合版困り感尺度（高橋，2012）などであった。分析の結果、大学院生の発達障害に関する困り感や援助ニーズは、AD/HD 関連問題と自閉症スペクトラム関連問題の 2 因子で構成されることが示された（Table 1）。また、これらの困り感と AQ の相関分析の結果、相関係数.4 から.6 の値を示し、有意な正の相関がみられた。

以上のことから、大学院生の発達障害関連の困り感や援助ニーズには、ASD 関連問題と AD/HD 関連問題があること、そして発達障害傾向の高い大学院生は、より高い援助ニーズを示していることが示唆された。

Table 1 *Pattern Matrix of Factor Loadings Resulting From Principal Component Analysis With Promax Rotation*

	Item	Loading Factor 1	Factor 2
AD/HD-related support needs (α=.91)			
14	I am not good at making new friends.	.86	
15	I don't feel at ease during group activities.	.84	
22	I have difficulty carrying a conversation with others.	.77	
23	I have difficulty understanding rules that are unspoken or which everybody else seem to know.	.75	
19	I wonder I am very different from others and this bothers me.	.71	
20	I feel isolated.	.70	
18	I am not good at interpreting what others are thinking.	.69	
13	Other people may feel that I frequently act inappropriately.	.67	
16	Not having many friends bothers me.	.62	
17	I sometimes flashback to past experiences and this causes me to feel anxious.	.54	
9	I often hurt other's feelings without meaning to.	.53	
10	I cannot handle multiple tasks.	.44	
7	I often forget about deadlines for assignments and paper works.	.37	
12	I do not want anyone to interrupt my daily routines.	.35	
21	I am very sensitive to specific sounds, smells, and touches.	.28	
ASD-related support needs (α=.80)			
2	I often lose things.		.84
3	I often forget to bring things.		.82
6	I cannot keep things tidy.		.64
4	I often act impulsively.		.63
8	I often make simple mistakes in school or at work.		.54
1	I am easily distracted.		.54
5	My daily living habits are often irregular.		.47
11	I am moody and feel this is a problem for me.		.44

Table 2 *Correlation coefficients*

	AQ	Adaptation of university students
AD/HD-related support needs	.64**	-.45**
ASD-related support needs	.41**	-.36**

** p<.01

（２）発達障害院生の主体性の発現

発達障害院生における主体性の発現・発達のあり方， 並びに、支援者の応答技術を検討するため、発達障害院生を対象としたグループ居場所支援（週１回、年間約 50 回、3 年間）を実施した。参与観察、参加者へのアンケート調査、並びに事例研究を行った結果、以下のような特徴が明らかとなった。

１）発達障害院生における「遊び」の意義

発達障害院生が主体性を発達させるには、いかに「遊び」を体験するかが重要であることが示唆された。参加した発達障害院生の多くは、児童期における他者との直接的な対人関係の乏しさはもちろん，携帯ゲーム機を介した間接的な対人関係の機会ですら希薄，ないしは皆無であった。例えば、ある学生は「学童が終わったら即帰宅する鍵っ子だった。読書，絵を描くなど，一人もくもくと遊んだり，作業をしたりしていた。集団登校ではなかったので，親友もいなかった」と語った。また別の学生は、「携帯ゲーム機で友だちと対戦したことはない」と発言した。Winnicott（1971/1979）は，「重荷の軽減は，正当性を問われない，体験の中間領域によってもたらされる。この中間領域は，遊びに“夢中”になっている小さな子どもの遊びの領域と直結している」と述べ、「遊び」の重要性を指摘しているが、本研究における多くの発達障害院生には、児童期における「遊び」そのものの体験が欠如していることがうかがえた。

また、「正当性を問われない」ことも重要な視点であるが、本研究で行った参与観察からは、大学院での研究生活は，ある価値観のもとで研究室の全員が新たな技術や素材等の開発といった同じ方向を向いて研究に取り組んでおり、正当性が常に問われている生活であることがうかがえた。これは、遊び体験とは真逆である。発達障害院生の場合、研究生活における正当性が束縛のように感じられたり，スケジュールの拘束といった感覚を生じさせたりすることが推察された。

２）ゲームを介した「チャム体験」による育ち直し

そのような大学院生に対し、ゲームを用いたグループ居場所支援を実施した結果、「チャム体験」が生起し、児童期に十分取り組めなかった経験を取り戻すことが彼らの育ち直し，すなわち、主体性の発現につながることが示唆された。Sullivan（1953/1990）は，「チャム」の重要性を語っている。発達障害傾向にある学生たちの多くは，児童期を振り返った時に，友だちがいなくても一人で読書をしたりゲームで遊んだりして，不自由はなかったと語っており、遊び，競争や妥協といった児童期におけるチャム体験は欠けていたと推察された。そのように考えると，学生という青年期にあって，本来ならば児童期に体験しておくべきであった「チャム」を体験し，取り戻すことが，彼らの育ち直しにつながる可能性がある。本研究では，カウンセラーも活動に参加し，共に楽しんだわけだが，それは，彼らにとってカウンセラーが「チャム」の一部となって機能することも意味しただろう。すなわち，カウンセラーは，個別心理面接では苦戦する青年の伴奏者として機能し，「ゲームの会」では彼らの「チャム」として機能するといった，二つの役割を担っていた。

また、Sullivan（1953/1990）は、ゲームについて児童期の文脈から次のように述べている。「ゲームはゲーム仲間との間の一種の共同作業であり，また競争という要素が加わり，さらに妥協という要素も非常に大きいことが少なくない」，「ゲームというものを考えると，児童期の特殊性の発展をいちばん理解しやすい」。このことからすれば、青年期において児童期的な遊び

をすることが，価値のある体験となり，彼らの心の回復にとって有効であったと考えられる。本研究に参加した発達障害院生の多くは，コンピュータゲームには馴染みはあるが，アナログのボードゲームはほとんど体験したことがなかった。ボードゲームの魅力を学生たちに尋ねたところ，多くが語られたわけではなかったが、自分の対人関係の傾向を見つめ直す学生がいたり，ボードゲームの戦略を語ったりするなど、彼らなりに対人関係を経験していることが分かった。

以上のことから、発達障害院生の主体性の発現・発達には,「関係性をつかむ場となる対人交流が必要であり，関係性の中から愛着が生じ，発達障害院生に自己感が芽生え，自分自身の意志を認知する」（神田橋，2010）に至るようなプロセスが妥当性をもっていることが示唆された。このプロセスが，主体性の発現・発達を促すような関係性原理に基づく支援モデルのベースと言えるだろう。

（３）研究室カウンセラー活動からみた大学院生の主体性の発現・発達

大学院生における主体性の発現・発達のあり方， 並びに、非言語を用いた支援の可能性をさらに検討するため、研究室カウンセラーを派遣し、その役割と機能を質的に分析した。研究室カウンセラー活動とは、学生の研究力に心理学の理論が応用可能であると考える理系の教授が運営している研究室に対し、カウンセラー２名を研究室へ派遣するものであった。研究室のフロアにある小さな演習室ほどの広さの無味乾燥な部屋をあたたかな癒しのある空間へと模様替えし、そこにカウンセラーが常駐した（以下、「カウンセリングルーム」と記す)。カウンセリングルームでは、個別相談モデルではなく、誰でも自由に出入りできる談話室の機能を中心とし、主体性や創造性の開発を目的とした個別面接やグループ面接を展開した。活動は、2016 年 11 月から週１回４時間であった。活動内容は、対話による面接、非言語的なグループワークが主であった。参与観察、参加者へのアンケート調査、並びに、事例研究を行った結果、１）カウンセラーとの情緒的コミュニケーションによって彼らの主体性の発露がみられたこと、２）非言語を介することで彼らの主体性が活性化したこと、が明らかとなった。

また、介入開始直後の 2016 年 12 月時点と開始１年後の 2017 年 12 月時点で、プリテスト・ポストテスト法による質問紙調査を実施した結果、「セフルエフィカシー」「行動の積極性」において、有意に高い値を示した（Fig.1)。質的にも量的にも、研究室カウンセラー活動が、他大学院生の自己効力感や積極性の向上に有効であることが示された。

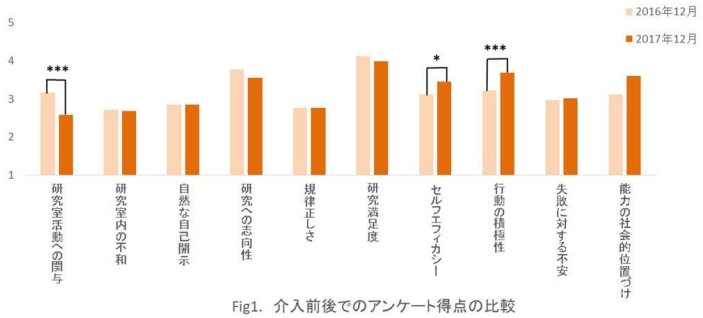

Fig1. 介入前後でのアンケート得点の比較

（引用文献）

福田真也(1996).大学生の広汎性発達障害の疑いのある２症例． 精神科治療学，11，1301-1309.
神田橋條治(2010)．発達障害は治りますか？.花風社.
鈴木健一(2014).注意欠陥障害の診断をうけ修士課程を修了した男子大学院生との面接過程．名古屋大学学生相談総合センター紀要，13，19-26.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1) 鈴木健一 2018 発達障害院生の主体性発現を促進させるチャム機能に関する一考察 Psychoanalytic Frontier（京都精神分析心理療法研究所紀要）5，26-31.（査読無）
2) 山田麻未・今村七菜子・鈴木健一・杉岡正典・山内星子 2018 学生の自主性を促進させる研究室での学生相談 名古屋大学学生相談総合センター紀要 17，31-35.（査読無）
3) 山内星子・鈴木健一・杉岡正典 2017 学生相談機関における発達障害学生の来談状況と課題 名古屋大学学生相談総合センター紀要 16，25-29.（査読無）
4) 鈴木健一・杉岡正典・山内星子 2016 投稿型相談によるピア・サポート活動に関する一考察（２）名古屋大学学生相談総合センター紀要 15，29-35.（査読無）
5) 山内星子・鈴木健一・杉岡正典 2016 大学院生における自閉症スペクトラム指数（AQ）および発達障害による困り感得点 名古屋大学学生相談総合センター紀要 15，42-47.（査読無）

〔学会発表〕（計　6 件）

1) 鈴木健一・杉岡正典　2018　学生の主体性に刺激を与えるグループ活動の試み　第 51 回全国学生相談研究会議　宮島シンポジウム
2) 今村七菜子・山田麻未・鈴木健一・杉岡正典・山内星子　2018　第 36 回日本学生相談学会　関東学院大学
3) Yamauchi,H. Ogura,M. Sugioka,M. & Suzuki,K. 2018 alidation of an ASD- and AD/HD-related support needs scale in a graduate student sample Asia-Pacific Conference on Education, Social Studies and Psychology　Taipei, Taiwan
4) 鈴木健一　2017　発達障害学生が体験するパラタクシスな世界　精神分析的心理療法フォーラム
5) 鈴木健一・杉岡正典・山内星子　2017　新たな学生相談体制の構築の試み（１）日本学生相談学会第 35 回大会　中部大学
6) 鈴木健一　2016　学生相談とサブカルチャー　日本精神分析的心理療法フォーラム第 5 回大会　京都文教大学

〔図書〕（計　2 件）

1) Blechner,M. The Dream Frontier 2001 Routlege　鈴木健一（監訳）2018 年『夢のフロンティア　夢・思考・言語の二元論を超えて』ナカニシヤ出版　総ページ数 321
2) 安田道子・鈴木健一（編著）　2016 年　大学生 大学生活の適応が気になる学生を支える(心の発達支援シリーズ 6)　明石出版　総ページ数 182

６．研究組織

研究分担者氏名：野邑　健二

ローマ字氏名：Nomura　Kenji

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：心の発達支援研究実践センター

職名：特任教授

研究者番号（8 桁）：50345899

研究分担者氏名：杉岡　正典

ローマ字氏名：Sugioka Masanori

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：心の発達支援研究実践センター

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：70523314

研究分担者氏名：山内　星子

ローマ字氏名：Yamauchi Hoshiko

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：学生相談総合センター

職名：助教

研究者番号（8 桁）：00608961